

---

# Narcotic Addiction

田中伊織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Narcotic Addiction

### 【Nコード】

N9852C

### 【作者名】

田中伊織

### 【あらすじ】

平凡で、何の取り柄もない江藤秋彦。幼なじみの森田優子とともに第一志望の学園に入学した彼は、そこで出会った宇佐美賢人に強引に剣道部に連れていかれる。平凡な生活を予想していた秋彦だが、そこから物語は動きだして。

## 第一話 出会いの季節（前書き）

執筆後に気付いたのですが、秀明学園という名前の学校は実在しません。が、本作品はフィクションであり、当然何の関係もありませんので御了承ください。

## 第一話 出会いの季節

「宇佐美賢人君」

初めて聞く名前が呼ばれ、前の席に座っていた人が教室の前へと歩いていく。

校門から続く満開の桜並木。

伝統ある旧校舎と、最新設備の整った綺麗な新校舎。

小高い丘の上に建つ、第一志望の学校。

今日から俺は、この学校の一員になった。

4月6日、秀明学園高等部入学式。

教室の前に出た宇佐美君という人物は、人気のお笑い芸人の芸風で自己紹介をした。

教室中がどつと沸く。

彼は緊張という言葉とは無縁なのだろう。

俺は、彼が羨ましくなった。

宇佐美君が席に戻る。

次だ……

鼓動が早くなっていく。

たかだか40人程度のクラスメートに自己紹介をするだけなのに、こんなにも緊張してしまう自分が嫌になる。

「江藤秋彦君」

俺の名前が呼ばれた。

俺は緊張を悟られないようにゆっくりした動作で立ち上がり、余裕ある風を装って前へと歩いていく。

「江藤秋彦です。よろしくおねがいします」

それだけを言っただけで席に戻る。

宇佐美君以外の人が言ったのとはほぼ同じ内容の自己紹介。

印象に残るはずがない。

俺は、どちらかというと真面目で、人見知りで、目立たないほう。

成績そこそこ、運動神経は人並み、身長は低いほうだし、顔がいいわけでも特技を持っているわけでもない。

つまりは、平凡な一生徒なのだ。

だから、当然高校生活も平凡なものになると思っていたが、その予想はあつという間に崩れ去ることになる。

このときの俺にそんなことがわかるはずもなく。

運命の足音は、すぐそこまで迫って来ていたんだ……

「アッキー」

呼ばれて振り返る。

そこには見知った顔があつた。

「……何？」

「あー、なんか冷たい」

森田優子。

家が隣で、物心つく前からの付き合いだ。

人見知りをする俺にとっては気兼ねなく話せる数少ない友人であり、彼女と同じクラスになったことは幸運だったといえるだろう。

「せっかく友達の少ないアッキーがヒマしてるだろーなーって思つて、可愛くて優しい優子さんが話しかけてあげたのに」

「ははは、冗談は顔だけにしてくれ」

「ああ、超失礼なこと言ってるし！」

軽口を言つて笑い合う。

いつもと変わらない光景だった。

「お、もしかして彼女？」

突然前の席から声がかけられた。

「いやー、お熱いこつて。愛のチカラで受験を乗り越えたつてやつか？」

「べ、別にそんなんじゃないわよっ！っていうか、人の会話を立ち聞きなんて、いい趣味してるじゃない」

「立ち聞きじゃない、座り聞きだっ！」

確かに、座ってはいるな。席が俺の前だし。

「そ、そういうことじゃなくてっ……」

「まあまあ、カタイコト言いなさんなっ。俺、宇佐美賢人、よろしくなっ！」

そう言って右手を差し出す。

やたらと爽やかだ。

「あ、ああ、俺は……」

「秋彦君だっけ？ 確か」

差し出された右手を握りながら名乗ろうとしたところで、先に言われる。

というか、苗字ならともかく、名前のほうを覚えていたとは。

「覚えてくれたんだ。そう、江藤秋彦」

「席が前後のヤツくらいは覚えるだろ？」

「ふーん、じゃあ私の名前は覚えてないと？」

優子がいたずらっぽく笑いながら言う。

だが、宇佐美君は笑顔で返した。

「優子ちゃんだろ？」

「えっ？」

二人同時に驚く。

「ふっふっふ、俺を甘く見るなよ？ このクラスのみならず、学園中の可愛い女の子はすでにチェック済みよ」

学園中って。

入学式が終わって間もないというのに、なんという早業。

呆れると同時に、その行動力が羨ましいとも思ってしまう。

「……コイツが可愛いって？」

「……何か言ったかしら、アッキー？」

「いえ、何も言っておりません」

不穏な睨まれ方をしたので、ごまかしておく。

「あっはっは、面白いやつらだ。とにかくよろしくな。俺のことは、賢人、でいいから」

昼休みを挟んで、午後は部活紹介の時間となった。

何も入学式の日にならなくてもいいのに。

俺は、特に入りたい部があるわけではなかったたので、興味のない暇な時間となってしまうていた。

「我々剣道部は、昨年の地区予選を突破し、そして……」

剣道部部长と思われる人が説明をし、ステージ上では部員が打ち合  
いをしている。

部長はかなり綺麗な人だ。

「あの人もチエック済みなのか？」

何気なく隣の賢人に尋ねてみる。

「気になるのか？」

賢人は意味ありげに笑う。

「別にそういうわけじゃないけど」

「ふーん？チエック済みというか、あれは俺の姉貴だ。美人だろ？」

「へえ」

「何だ、つまらない反応だな」

「どう反応してほしかったんだ？」

「そりやお前、俺もそう思うぜ我が義弟よ、とか」  
おとうと

「あっそ」

「まったく、そんなことじゃ一流の芸人になれないぞ」

「なる気ないし」

賢人はやれやれというように肩をすくめた。

「まあ、俺はあとで剣道部の体験入部に行くから、そのとき紹介し  
てやるよ」

「俺は剣道部に入るつもりはないぞ」

「まあそう言うな。美人部長に手取り足取り教えてもらえば気も変  
わるって」

「いや、変わらないから」

「いやいや、変わるって」

「いやいや、変わらないって」

「いやいやいや」

「いやいやいやいや」

「いやいやいやいやいや」

「……不毛だ」

「ふっ、勝ったな。やはりお前には剣道部に入ってもらった」

「……もういいよ、何でも」

こうして、強引に押し切られる形となった。

「あーねきつ」

「あら、賢人？邪魔しに来たの？」

部長さんが不思議そうな顔をした。

「邪魔って……。体験入部だよ」

賢人が苦笑する。

「女子部部長の宇佐美亜希よ。よろしくね」

「あ、江藤秋彦です」

「私は森田優子です」

俺の横の優子が言う。

というか、なんで優子までついてきたのだろう。

「俺は宇佐美賢人です」

姉弟なら自己紹介はいらないだろう。

脳内でツッコミを入れておく。

「二人とも、よろしくね」

亜希さんは賢人の冗談をスルーした。

「ちよ、ちよつと姉貴……」

「あら、いたの、賢人？」

可愛らしく小首を傾げてとぼけた。

「姉貴、そのやり方で一体何人の男をたぶらかしたんだ？」

「失礼ね、まだ一人もないわよ」

「まだ、とききましたか」



「そう、まだ、よ」

すました顔で答えた。

「仲いいんですね」

優子が感心したように言う。

「姉離れできなくて困ってるの」

亜希さんは困ったように言うが、実際はまんざらでもなさそうな顔を  
をしている。

「ふっふっふ、俺のシスコンは中学でも有名だったぜ」

「なるほど。お前はシスコンだったのか」

「ふっふ、今でもお風呂一緒に入ってるもんねー？」

「ええっ!？」

俺と優子の声が見事にハモった。

「嘘教えるのはやめてくれ」

賢人は呆れたように言う。

「あら、ホントにしてもいいのに」

冗談だか本気だかわからない顔で亜希さんが言う。

さすが姉だけあって、賢人のあしらい方をよく心得ている。

「んじゃ、俺は着替えてくるよ。キミたちは体験入部を楽しんでい  
つてくれたまえ」

「まるで既に部員であるかのような言い草だな」

「俺は経験者だからな」

納得できるような、そうでもないような理由だ。

どうやら賢人は中学で剣道をやっていたようだ。

言われてみれば、竹刀と思しき細長い布袋を持っていた。

賢人はそのまま更衣室に消えた。

「それじゃ、体験入部ね。今日はそんなに激しいことはしないから、  
制服のままで大丈夫よ」

そう言って、剣道場の中へと入っていく。

「じゃあ、まずはこれを使って竹刀の振り方から。徹くん、沙耶ち  
ゃん」

亜希さんが二本の竹刀を差し出し、近くの部員を呼んだ。

「新入部員の指導、お願いしていい？」

「あ、はい、わかりました」

「お任せください、部長」

二人は快く引き受けた。

部長は他の部員と練習試合をするようだ。

「美人の部長に教えてもらいたかったかもしれないが、大会が近いんだ。ここは俺たちで我慢してくれ」

「ちよつと、それって私が美人じゃないって言いたいわけ？」

徹くんと呼ばれた人の言葉に、沙耶ちゃんと呼ばれた人が返す。

「ははは、沙耶は面白いことを言うね。どう見てもその通りだろう？」

「一回死ね！」

「ぼげらっ」

沙耶さんが持っていた竹刀を徹さんの脳天に振り下ろす。

徹さんは謎の悲鳴を上げて沈み、動かなくなった。

い、痛そう……

「さて、それじゃあ握り方からね。右手は柄の一番上、鰐につけるように、左手は柄の一番下を握って」

沙耶さんが言いながら実演する。

それを真似て握ってみる。

「それを真正面に構えて、左足を少し引くの。これが基本の構えね」  
沙耶さんの構えには、今にも打ち込まれそうな迫力があつた。

俺たちも真似てみるが、そんな迫力は出ない。

きつと、これが経験者と初心者の違いというものなのだろう。

ちらりと向こう側を見ると、賢人が着替えから戻ってきたところのようだ。

素振りを始めた賢人の構えには、沙耶さんと同質の迫力があつた。

「竹刀を真っ直ぐに振り上げて、真っ直ぐ振り下ろす」

沙耶さんはゆっくりと振っているが、その竹刀には大きな力が込め

られているように見えた。

これは、やってみると意外と難しい。

ゆっくりでも、振った勢いで体がふらふらしてしまう。

振り下ろしたところでぴたっと止めるには、結構な筋力がいるようだ。

「今日の課題は、これを真っ直ぐ打つこと」

沙耶さんが取り出したのは、ピンポン球だった。

……結局、その日の練習中にピンポン球を真っ直ぐ打つことはできなかった。

「……なんか成り行き任せで剣道部に入部することになっちゃったなあ」

「俺の美人姉貴に会えたんだからいいだろう？」

帰り道、なんだか不思議な気分だった。

大会の近い剣道部は特別に下校時刻を越えての練習が認められているらしく、上級生たちはまだ練習している。

新入生三人での帰り。

剣道部に入るつもりなんてまるでなかったのに、既に一員として認識されている。

まあ、入りたい部があったわけでもないし、かまわないか。

「それにしてもピンポン球の練習は難しかったなあ。全然できなかった」

「お前、ニブすぎるんじゃないか？」

「そうよ。私なんかすぐできるようになったんだから」

「運動神経が異常にいいお前と一緒にするなよ。俺はフツーなんだから」

「私が普通じゃないとも言つのかしら？」

「いえいえ、そんなことはまったくぜんぜんこれっぽっちもありません」

ぐっと握られた拳に身の危険を感じ、すぐに否定しておく。

根拠なんてないけど。

なんとなく、今までとは違った学校生活が始まるような気がしていた。

## 第一話 出会いの季節（後書き）

お読みくださり、ありがとうございます。よろしければ評価・感想等いただけると幸いです。

## 第二話 変わらない日常と変わる気持ち

チュン、チュン……

朝。

鳥の鳴き声が聞こえる。

シャッ

カーテンが開けられたようだ。

瞼の向こうに、眩しい光を感じる。

「ほーら、もう起きなさいっ！いい加減遅刻するわよ」

「んむう……」

眠い。

といつかなんだか体が重いような……

昨日、何かしたっけ？

目を開くと、すでに制服を着た優子が立っていた。

「おはよう。目が覚めた？もうご飯食べてる時間ないから、さっさと着替えなさいよ」

言われて時計を見ると、針はあらぬ時刻を指し示していた。

「うげっ！こんな時間かよっ」

「はいはい、玄関で待ってるから、早くねー」

優子が部屋を出て行ってから、ベッドを出ようとしたとき。

「うっ！？」

鈍い痛みが襲ってきた。

「あだだだ……」

もうどこが痛いのかすらわからない。

ベッドから出るだけで一苦労だ。

「あ」

思い出した。

昨日、賢人に剣道部に引ッ張っていかれたんだっ

……ってことは、筋肉痛か、これ………？

「原因がわかってても、痛みは引かないよなあ……」  
当たり前前のことを口にしつつ、のろのろと着替えた。

「お、おまたせ……」

「遅いっ！遅刻するわ……よ………って、どうかしたの？」

のろのろと体を引きずるように現れた俺を見て、優子が驚いている。  
そういえば、こいつも同じ練習をしたはずだよな……？

「お、お前は何ともないのか……？」

「何とも、って……何？」

「筋肉痛」

「ああ。アンタ、運動不足なんじゃない？」

「違うって。今まで使ったことのない筋肉使ったせいだって」

「まあ、とにかく早く行きましょ。その調子じゃ、ホントに遅刻しちゃうかもね」

「うはあ……」

俺たちは、軋む体に鞭打って、のろのろと歩き出した。

「それにしても、なんでお前は平気なんだ？」

同じ練習をしたのに、優子はケロッとしている。

「うん？さあ……なんでだろ？」

「実は怪しいヨガでもやってるとか？」

「んなのやってないわよ。いつもみたいにストレッチと柔軟を……」

「えっ？いつもそんなのやってるのか？」

意外な習慣だった。

「う、うん、まあね……昨日はお風呂で、腕とかよく揉み解したし

……」

お風呂で……。

い、いかん、イケナイ妄想が……

……って、優子相手に何考えてるんだ、俺は。

小さい頃は一緒にお風呂も入ってたというのに。

「……？どうしたの？急に黙り込んで……」

「い、いや……」

「あつ、わかった。お風呂のこと聞いて、想像しちゃったんだー？  
アッキーのえっちー」

「ちっ、違っつて」

どうせ想像するなら、もつと胸元にポリウムのある人のほうが……

「……アッキー、なんか今、ものすごく失礼なこと考えてない？」

「うっ」

「悪かったわねっ、胸がなくてっ！」

「いつ、いやっ、ナイなんてちっとも思っでないから！ちよつと太  
めの男子・山下君より小さそうなんて、これぽっちもっ！」

しまった、自爆だ！

「思ってるんじゃない！バカーーーっ！ー！」

「わわーーーっ！？」

結局、悲鳴を上げる体に鞭打って、教室まで走ることになった。

「あ、あれ……？俺は一体……！？」

気付いたら昼休みになっていた。

「……何寝ぼけてんだ？1時間目からずっと寝通しだったじゃない  
か。……まだ授業初日だというのに」

前の席の賢人が呆れたように言う。

「そっだっけ？」

まるで記憶がない。

教室を見渡して優子を探すと、女子数人と一緒に昼食を摂っていた。  
ちらりと目が合うと、朝のことをまだ怒っているのか、すんごく睨  
まれた。

「……ん？」

すぐさま優子から目を逸らすと、逸らした先、窓の外に、キツネが  
いた。

じつとこっちを見ていたようだが、目が合うとすぐに綺麗な銀色の  
毛並みを翻して飛び降りた。



「どうした？」

「いや、今、窓の外に銀色のキツネが」

「……はあ？」

賢人は訝しげな表情をした。

「お前、まだ寝てんじゃないか？ここ、4階だぞ？キツネなんかいるわけないだろ。しかも銀色って何だよ」

「……それもそっか」

どこなくいてもおかしくないような不思議な雰囲気を持っていたのだが、説明するのも面倒で、適当に相槌を打っておいた。

「んじゃ、頭もすつきりしたことだし、購買でなんか買ってくるよ」

「それじゃ、俺ヤキソバパンな」

「自分で行けよっ！」

「なはは、冗談だ。しかしだな、現実はときに冗談よりも残酷なものなのだよ……」

突然芝居がかり始めた。

「何言ってるんだか」

「本当のことだぞ。おそらく、この時間ではもう、何も残ってはいないだろう」

「んな大げさな」

まだ昼休み始まって10分くらいだぞ。

「ふふふ、帰ってきてからもそのセリフが言えるといいな。あそこは昼は戦場なんだ」

「あーはいはい」

これ以上こいつに付き合ってたら、本当に売り切れになってしまうかもしれない。

賢人を適当にあしらって、購買へ向かうことにした。

……… およそ3分後、俺は、賢人の言葉が嘘でなかったことを知った。

現実はときに冗談よりも残酷なものなのだよ。

本当にその通りでした、賢人先生。

そんなわけで、本日の昼食は紙パックの牛乳だけでしたとさ。とほほ。

午後の授業が終わり、放課後。

なし崩し的にはいえ、入部してしまった剣道部へ。

昨日と同じ、ピンポン球を打つ練習……

カンッ

「あっ」

初めて竹刀の芯で捕らえた。

「やるじゃない。偶然だろうけど」

横から優子が言う。

態度がいつもと変わらないところを見ると、朝のことは忘れてくれたようだ。

「ふっふっふ、負け惜しみか？」

「冗談。私は昨日何回も成功させてるんだから」

「そーかそーか、今日は調子が悪いだけだよな」

優子はさっきから失敗してばかりだった。

「う、うるさいわねっ！……昨日の疲れがまだ残ってるみたいなの」

「ん、そうなのか？少し休む？」

今日の指導担当の徹先輩が言う。

「甘やかしちゃダメですよ、先輩。上達しないからって言い訳してるだけですから」

「ちっ、違うわよっ！本当にそうなんだってばっ！……っっていうかアンタ、筋肉痛はどうしたのよ？」

「む……そういえば」

いつの間にか、すっかりなくなっている。

それどころか、昨日よりも動きやすいようにさえ感じる。

「午前中ずっと寝てたのがよかったのかな」

「ふう、先生たち呆れてたわよ？初日だっていうのにいきなり爆睡なんだもん」

「起こしてくればよかったのに」

「あのねえ、先生たちに何回起こされたと思って……」  
優子が言いかけたときだった。

「メー……ンツ!!」

パパンツ!

防具を打つ竹刀の小気味よい音と男女の声が、二つずつ重なり合って剣道場全体に響き渡った。

しーんと静まり返る。

二人の剣士がお互いを打った勢いで背を向け合っていた。

一人は男子部部長の久木田先輩、もう一人は……

「すごい……」

優子がつぶやく。

俺は背を向けていたので見えなかったが、優子には見えていたようだ。

練習を再開したのか、剣道場のあちこちから竹刀の音が響き始めた。

「そんなにすごかったのか?」

「うんっ、一瞬の間を突いた久木田さんの攻撃もすごかったけど、それよりあっちの女の人がすごかった!」

「ああ、亜希さんはすげー強いからな」

「ええっ!? 亜希さんなんですか!？」

その人がこちらを振り返ると、腰には『宇佐美』と書かれていた。

「あっ……」

「本当……」

その後の練習中の優子は、亜希さんに触発されたせいか、いつそう気合が入っていた。

「っ、疲れた……」

「俺の美人姉貴の勇姿が見られたんだからいいだろ?」

「……なんか昨日も似たようなセリフを聞いた気がするんだけど、私の気のせいかしら?」

「おお、珍しく意見があつたな、優子」

賢人のシスコンは筋金入りのようだ。

「ほんじゃ、俺、こつちだから」

「おう、じゃあな」

「お疲れー」

途中の三叉路で賢人と別れた。

「それにしても、亜希さんかっこよかったよな。俺は終わったところしか見てないけど」

「うん、ホント惚れ惚れしちゃったよ。あれは絶対見なきゃ損だった。アッキーは残念だったね」

残念だったね、と言いつつ、優子の声は弾んでいた。

「うわー、なんかそういう言い方されるとすんごい損した気分になる」

「あはは、なれなれ」

優子は、本当に楽しそうに笑った。

そんな風に笑う優子を、不覚にも可愛いなんて思ってしまったりして。

邪気のない笑顔につられて、俺も笑った。

そんな俺を見て、優子がまた笑って。

優子が笑うのを見て、俺がまた笑って。

おかしいことなんて何もないのに、なぜか笑いは止まらなくて。楽しいことなんて何もしていないはずなのに、とても楽しくて。

家の前で優子と別れるまで、ずっと二人で笑い合っていた。

部屋に入ると、着替えもせずにベッドに倒れこんだ。

さっきまではあんなに楽しい気分だったのに。

今は、なぜかとても寂しい。

目を閉じると、すぐに優子の笑顔が浮かんできた。

そうすると、不思議な感情が胸の中を満たす。

心地よくて、苦しい。

心が躍るようで、切ない。

そんな相反する感情が混ざり合ったような気持ち。

しかし、それは一瞬のことで、その不思議な気持ちの正体を掴もうとしたときにはすでに消えていた。

「ふう」

少し大きさに息をつく。

開けっ放しのカーテンから窓の外を見ると、向かいの部屋のカーテン越しに光が漏れていた。

窓を開け、窓をノック。

こんこんっ

.....。

.....。

無反応だった。

もう一度。

こんこんっ

すると、カーテンと窓が開けられ、部屋の主が顔を出した。

いつもの部屋着に着替えていた。

「少しはタイミングを考えなさいよね。びっくりするでしょ」

「ん、タイミング悪かったか？」

「悪かったか？じゃないわよ。帰ってきてすぐなんだから、着替えてるに決まってるでしょ」

「ああ、そっか。悪い」

「まあ、別にいいけど。それで、どうしたの？」

「ん？」

「何か用事があるんじゃないの？」

「いや、別にないけど」

「あ、あのねえ.....」

優子がため息をつく。

「用がなきゃ呼んじゃいけないのか？」

「いけないってことはないけどさ、私たち、さっきまで話してたで

しょうが」

そういえばそうだった。

でも、部屋の明かりが点いていて、優子の顔を思い出したら、体が勝手に動いていた。

……なんだか恥ずかしくなってきた。

「ん、いきなり呼び出して悪かった。じゃあ、風邪引くなよ」

「あ、ちよつと……」

そのまま窓を閉め、カーテンを引く。

「もう、何なのよ……」

そんな声が聞こえ、ガラス越しに、窓とカーテンが閉められる音がした。

なんか今日の俺はよくわからない。

特別変わったことなんて起こってないのに、感じ方が違うというかとにかく、今日はもう寝てしまおう……

翌朝、シャワーを浴びる時間を取るために目覚ましを早め時間にセツトし、部屋の明かりを消して瞼を閉じた。

### 第三話 ケンカ

ピ。ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピ。ピッ……

耳慣れた電子音が聞こえる。

ピ。ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピ。ピッ……

あー、もう、うるさいな……

ピ。ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピ。ピッ……バシッ

「だー、くそ、黙れこの野郎！」

あまりの眠気に、つい目覚ましに八つ当たりしてしまった。  
でも起きなきゃいけないんだよなあ……

俺は仕方なくベッドから起き上がる。

「はああ……」

よくはわからないが、ため息が洩れた。

昨夜、何かを考えていたような気がするんだけど……  
あまりいいことではなかった気もするけど。

何だっけ？

ピ。ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピ。ピッ……

「おわっ！？」

目覚ましが再び鳴り始めた。

「ん？」

止めようとして、はたと気付く。

「壊れてる……」

強く叩きすぎたのか、アラームを止めるボタンが外れてしまっていた。

ピ。ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピ。ピッ……

「……………」

憂鬱な気持ちになりながら、電池を外して止めておいた。

「きやつー！？」

「うわっ!？」

部屋から出て、階段を下りようとしたところで、優子とぶつかりそうになった。

ちやうど最後の一段を上ろうとしていた優子は、バランスを崩して

……

「あ、危ないっ!」

とつさに体が動いた。

「きゃああっ!」

間一髪。

なんとか間に合ったみたいだ。

と思ったら、あ、あれ?

「うわわっ!？」

ドタン!バスン、ゴロゴロ……バタバタ、ゴンッ!

「あだっ!？」

……見事に一階まで転げ落ちた。

しかも最後は頭打つし。

「だ、大丈夫、アッキー……?」

優子が心配そうに覗き込んでくる。

「あ、ああ、このくらいなんともない」

「またそんなこと言って。ほら、頭打ったんでしょ?どこ?」

「ここ」

優子の手がそつと触れる。

「っ……」

「あ、ごめんね、痛かった?」

「い、いや、平気……」

優子の手が触れていると、さっきまでジンジンと痛んでいた箇所から、痛みがスーッと抜けていくようだった。

「その……ごめんね。……っていうか、ありがと」

「え?」

「私のこと、庇ってくれたでしょ?だから、ありがと」



そう言つて、優子は優しく微笑んだ。

「……………」

ときどきしていた。

……べ、別に、優子が可愛いとか、笑顔に見とれちゃったとか、そういうことじゃないからな？

「つて、誰に言い訳してんだ、俺は」

「え？」

「な、なんでもない……………」

「……………？あ、それより、今日はいつもより少し早いじゃない」

「ああ、昨日風呂入らずに寝ちゃったから、シャワー浴びようと思つて。少し汗臭いだろ？」

「それでまだ着替えてないわけね」

優子は納得したように言う。

「んじゃ、そういうわけだから」

「じゃあ、私はご飯の用意しておくね」

「用意つたつて、温めるだけだろ」

共働きの両親が用意しておいてくれる朝食を温めるだけなので、一人でもできるのだが……

「はいはい、遅刻しちゃうから早くしてよね」

優子はそのままキッチンへ入っていった。

「やべっ、ほんとに時間がなくなる」

俺は、シャワーをさっさと済ませることにした。

シャーーーーー

お湯がシャンプーの泡を流していく。

「ふあああ……………」

眠い。

「やつぱ朝はギリギリまで寝ていたいよなあ……………」

「じゃあ夜のうちに済ませておきなさいよねー」

「ああ、いや、昨日は特別だったというか……………」

「へー？どう特別だったの？」

「うーん、なんか考え事してたような気がするんだよね」

「どんなこと考えてたの？」

「それが思い出せなくて。あんまりいいことじゃなかった気が……」

「……ちよつと待て。」

「なんでお前がそこにいるんだよっ！」

脱衣所から返事をしていたのは優子だった。

「あはは、やっと気付いた」

「あはは、じゃないっ！」

「背中、流してあげよっか」

「せなっ……」

「……」

「……」

「ちよ、ちよつと、本気にしないでよっ？少しからかってみただけなんだからねっ」

「するかっ！さっさと戻ってろっ！」

優子はなにやらぶつぶつと言いながら、脱衣所を出て行った。

「っ、疲れた……」

キーンコーンカーンコーン

「賢人、学食でも行くか？」

「おいおい、今日は土曜だから学食も購買もやってないぞ？」

「えっ？」

言われてみると、賢人は既にコンビニの袋を持っている。

「来るときに買っておけよな。コンビニ、結構遠いぞ」

「うーん……」

土曜なら授業は午前中だけで終わりだ。

あとは部活だけか……

「仕方ない、買ってくるよ」

「部活、1時からだから、あんま時間ないぞ」

「わかった」

賢人と別れ、小走りにコンビニに向かう。

「ん？」

校門を出ようとしたところで、少し離れたところに見知った人影を見つけた。

あれは、優子と、徹先輩か……？

二人で何やら楽しそうに話している。

なんだか胸がざわつく。

まあ、水を差すのもなんだし、今は昼食の調達が先決だ。

そう思っているにも関わらず、足は自然と二人のほうへ向こうとしている。

二人の会話に入りたいわけではない。

二人の間に入りたい。

自然とそんなことを考えていた。

……何考えてんだ、俺。

楽しそうなんだから、放っておけばいい。

何を話しているのか気になるなら、このあとの部活のときにでも聞けばいい。

それなのに、そうしようとしないう俺がいる。

……どうかしてる。

俺は、全速力で校門を後にした。

なぜかイライラしていた。

胸が苦しい。

嫌な動悸がする。

膝ががくがくと震え、視界は白くなっていく。

体は熱く、全身の汗腺から冷や汗が吹き出し、寒気がする。

どうしようもないくらいに苦しさで、行き場のない怒りを感じている。

この場にうずくまって泣き出したい。

すれ違う、名前も知らない人に、殴りかかってしまいたい。

コンビニの前に古いタイプの不良でもいたら、ケンカになるかな……

そんな馬鹿げたことを思いながら、ただひたすらに走った。

「お、おお、早かったな、秋彦」

息を切らして教室に飛び込むと、賢人が驚いたように言った。  
全速力で走ったのだから当然だ。

「まあな」

「なんだよ、機嫌悪いな」

「そんなことないって」

幸いにも古いタイプの不良には出くわさず、無事に昼食を買った。  
小銭をレジのカウンターに叩きつけたときには当然店員は驚いた様子だったが、俺が不機嫌なのを悟ったのか、何事もなく対応していた。

コンビニの接客マニュアルには、『不機嫌な客の対応』なる項でも存在しているのだろうか。

「何があつたのかは聞かないほうがいいか？」

「何もないって」

事実だった。

本当に、特別なことは何もないのだ。

部活の先輩と後輩が話す、なんて、自然極まりない。

それなのに、優子と徹先輩が話しているのを見かけてから、なぜか無性に腹が立つ。

それと背中合わせのように、苦しさが付きまとっている。

自分のことなのに、ぜんぜんわからない。

俺は、むっつりと押し黙ったまま、昼食を摂った。

賢人は気を遣ったのか、話しかけてこなかった。

今日の部活は、打つ練習だった。

沙耶先輩が、竹刀の両端を持って頭上に一文字に構え、それを面の

要領で打つ。

「力を入れすぎないで。上体を楽にして、素早く竹刀を振り下ろすの」

「叩くんじゃなくて、相手を打つイメージよ」

「竹刀が当たるポイントを意識して。どこに当てるか、コントロールするの」

一本打つごとに、沙耶先輩がアドバイスをくれる。

しかし、せっかくアドバイスをもらっても、そのほとんどは右から左に抜けていってしまう。

どうしても、隣でやっている優子と徹先輩が気になるのだ。

会話内容は、俺と沙耶先輩の会話と大差ない。

同じ練習をしているのだから当然だ。

だが、優子はとても楽しそうに返事をしているように思える。

「……だから何だってんだ？」

「え？何？」

「あ、いえ、独り言です」

「ふふ、練習中に自分の世界にトリップするなんて、アッキーはホント想像力、っていうか妄想力が豊かなんだから」

隣から優子が口を挟む。

「うるさいな。いちいち耳をそばだててないで練習しろよ」

「だ、誰がそばだててるのよっ」

竹刀を振り回し始めた。

「うわ、ちよつと、あぶつ、危ないって」

ちよつとした冗談なのに、何を慌ててるんだ？

「はは、優子ちゃん、江藤君をいじめるのはそれくらいにしてあげなよ。ほら、打つのはこっち」

徹先輩はそう言っつて、竹刀を頭上に構えた。

……『優子ちゃん？』

昨日のピンポン球の練習のときは、『森田さん』だったはずだ。たった一日で、そんなに仲良くなったのだろうか。

胸がざわつき始めた。

昼休みに感じたものよりも強烈な、どす黒い感情が渦巻く。  
なぜか徹先輩が憎い。

今、徹先輩の顔を見たら、きつと手にした竹刀で殴りかかってしま  
う。

それほどまでに膨れ上がった衝動を抑えようと、俺は自分の足元を  
睨みつけた。

「……くん、江藤君」

沙耶先輩の声に、はつと我に返った。

「大丈夫？ 具合悪い？」

「え？ あ、はあ……」

肯定とも否定ともつかない返事をする。

どうやらかなりひどい顔をしていたらしい。

「大丈夫か？ 保健室、行くか？」

「っ……！」

背後からかけられた徹先輩の声に、体がびくつと震えた。

「あ、いえ、少し体調が悪いだけですから。………すみません、今日  
は早退させてください」

徹先輩の顔を見ないようにそう言つと、俺は竹刀を捨て、返事も聞  
かずに走り出した。

「あ、おいっ」

「ちよつとっ」

「ど、どうしたのよっ」

3人の戸惑ったような声が聞こえてきたが、無視して走り続けた。

「くそっ」

ぼすんっ

部屋に入り、クッションを思いっきり殴りつける。

「は、はは……」

ちつとも痛くなくて、思わず笑ってしまった。

そのまま脱力したようにベッドに倒れ込む。

「何なんだよ……」

自分の心が全くわからない。

いつも通りに行動できない自分が歯痒い。

何かが変わったはずなのに、何が変わったのかわからなくてイライラする。

自分の中の、嫌な感情に振り回されるのが不快だ。

「……………」

目を閉じる。

浮かんでくるのは、優子の顔……

笑ったり、怒ったり、照れたり、忙しいヤツだ。

幼い頃からずっと見てきて、今なお毎日見る顔。

親の顔より、自分の顔より、頻繁に見る顔。

なのに見飽きることはない、不思議な顔。

その顔が、ふと寂しそうな笑みに変わり、隣に現れた徹先輩の手を取って……

「うわあああああぁあつ!!」

理由のない激しい憤怒と、それをすっかり呑み込んでしまうような絶望感に、思わず絶叫し、がばっと体を起こす。

辺りは真っ暗だった。

どうやら眠ってしまったらしい。

こんこんっ

窓が叩かれた。

優子に向かいの窓から身を乗り出している。

「大丈夫？なんかすごい叫び声が聞こえたけど」  
窓を開けるなり、そんなことを言われた。

「別に、なんでもない。……何か用？」

正直言つて、あまり話したい気分ではない。

イライラが、今にも溢れてしまいそうだ。

できれば一人にしてほしいんだけど……

「うーん、用っていうか……部活のとき、どうしたの？」

「別に」

「……アッキー、機嫌悪い？」

「別に」

「アッキー、さっきから、別に、しか言っていないよ？」

普段通りの俺なら、さらりと流せるところだっただろう。が……

「ほっとけよっ！何なんだよ、お前っ！」

必死に抑えつけていた激情が破裂した。

「保護者ヅラしやがって！一人になりたいっつつてんだよっ、わかんねえのかよっ！」

優子はただ心配してくれただけなのに。

「いつもいつも、お節介なんだよっ！いい加減にしろっ！」

言うつもりがないどころか、考えてもいなかったことが口からポンポン飛び出す。

「迷惑なんだよっ！俺に構うなっ！」

「……何よ」

優子の顔が、だんだん怒りに赤くなっていく。

「少し気になっただけじゃないっ！一人になりたいならはつきりそう言いなさいよっ！私だって好きでアンタに構ってるわけじゃないんだからっ！一人じゃ何もできないくせにっ！アンタのこと心配なんかせんぜんしてないんだからねっ！」

「心配してないんだったら気にかけるなっ！」

「うるさいっ！アンタのことなんてミジンコほどにも思っていないわよっ！バカッ！！」

ピシャッ！！

勢いよく窓が閉められ、カーテンが引かれる。

「……はあ……」

優子の姿がカーテンの向こうに見えなくなると、冷静な思考が戻ってきた。

と同時に襲ってくる、激しい自己嫌悪と後悔。



「八つ当たり、しちゃったな……ごめん……」  
聞こえるはずもないのに、一人呟く。

のろのろと窓を閉め、カーテンを引いた。  
大した長さは生きていないが、確実に人生でワースト3には入るで  
あろう、陰鬱な夜だった。

#### 第四話 告白、そして……

4月13日、木曜日。

ザアーーーー

雨が降り続けている。

教室の窓から見える校庭には、巨大な水溜りができている。

キンコンカンコン

「それじゃ、今日はここまでな。大事なことだから、しっかり復習しておけよ」

「きりーつ、きをつけー、れー」

週番の間の抜けた声で礼をして、教師が教室を出て行く。

昼休みになった。

優子のほうへ視線を投げかけると、目が合って、ぷいと逸らされた。

土曜の夜にケンカしたきり、まだ謝れていない。

優子とまったく話をしない連続記録、5日目。

今までの自己ベストは3日くらいだろうか。

ぶつちぎりの過去最高記録であり、今なお更新中。

あれから謝ろうと思って優子の様子を窺っているのだが、チャンスは一向に訪れない。

「お前からまだ仲直りしてないのか？」

雰囲気を感じたらしい賢人が話しかけてくる。

「まあ……」

「何が原因が知らんけど、早いとこ謝ってやれよ。優子ちゃん、待ってんだろ」

「いや、待つちやいないだろ」

優子の様子を見る限り、目が合ってもすぐに逸らすし、まだ怒っているように思う。

「はあ……。お前の目は節穴か」

賢人は呆れた顔で大げさにため息を吐いた。

「とにかく、この昼休み中に謝っちまえよ。絶対待ってんだから」  
「うっん……」

よくはわからないが、賢人はそれなりに自信があるようだ。

第一、このままチャンスを待っていても、結局謝れないままずるずるといく気がする。

よし、謝ろう。

「ゆう……」

「優子ちゃん、いるー？」

気合を入れて、いざ話しかけようとしたところで、邪魔が入った。

「あ、徹先輩、どうしたんですか？」

優子が邪魔した人のところへいく。

仕方ない。

徹先輩の用が済むまで待とう。

やたらとイライラしながら、俺は待つことにした。

「……なんか、やけにイライラしてないか？」

「……別に」

徹先輩に対する得体の知れないイライラは、なるべく顔に出さないようにしていたのだが、やはり隠し通せないようだった。

徹先輩は特段性格の悪い人ではない。

むしろ、面倒見がよく、優しい。

長い付き合いではないが、いい先輩と言って差し支えないし、俺もそれはわかってるつもりだ。

俺は、『善人ヅラをした悪人を本能的に見極める特殊能力』などを備えているわけでもないし、まして、彼がそのような人物だとも思えない。

つまりは、敵意を持つ理由がないのだ。

なのに、俺は彼に対し敵意を持っている。

これは、本気で何とかしなくてはならない。

「あれ？」

教室の入り口で話していた二人は、そのままどこかへ行くようだ。

「あらら、タイミング悪かったな。……って、どうした？さっきより機嫌悪くなってるみたいだが」

「なんでもない」

平気を装うが、胸の奥深くに手を突き刺され、心臓を鷲掴みにされているかのような苦しみが襲ってきた。

「お、おい、ほんとにどうした？悩みでもあるのか？」

「……悩んでるように見えるか？」

隠し通すのは、やはり無理なようだ。

賢人なら、相談してみてもいいかもしれない。

「やっぱなんでもなくない。……かも」

「なんだよそりゃ。話す気になったのか？」

「ああ」

それから、徹先輩への敵意について話した。

徹先輩を見ると、イライラすること。

同時に、胸が苦しくなること。

その理由がわからないこと。

「それって、いつからだ？出会ったときから？」

「えっ？」

言われて気付いた。

出会ったときには、こんな感情はなかった。

……というか、出会ったときは沙耶先輩に沈められてたんだよな。

その次の日も別に関心なかった。

さらに次の日、土曜日……

そうだ。

「土曜日の昼だ……」

「何かあったのか？」

何のことはない、優子と徹先輩が話しているのを見かけただけだ。

だが、そのときは確かにこの感情を抱いていた。

それを話すと、賢人は途端にげんなりした。

「……それって、ただのヤキモチだろ」

「は？」

「だから、ヤキモチだって。お前は優子ちゃんが好きで、徹先輩に嫉妬してんの」

優子が好き？

俺が？

「……んなバカな」

そう言いつつも、頭のどこかではなるほどと納得していた。

「バカはお前だ」

賢人は呆れたように言う。

そう、バカは俺だ。

朝起きるのが辛いのも。

興味なんてなかったはずの剣道を真面目にやっているのも。

いつも通りの帰り道が楽しいのも。

全部、優子がいたからだっただ。

共働きの両親が忙しくなつて、出社が朝早くなつたとき

「おじさんもおばさんもないんじゃないじゃ、寝坊ばっかでアッキーがヒツキーになっちゃうでしょ？私が起こしに行つてあげるわよ」

秀明学園を受けると決めたとき

「アッキーじゃ学力不足もいいところよ。私が教えてあげる」

階段から転げ落ちたとき

「大丈夫？頭打ったんでしょ？どこ？」

いつでも隣にいて、大なり小なり、何かがあるたびに助けてくれた。

「優しい子になるようにって、優子ってつけたんだって。そのまますぎて笑っちゃうよね」

優子は、いつだって優しくかった。

素直じゃないところがあるけど、いつでも心の中では気を遣つてくれていた。

そんな優しい優子に向かって、俺は……

「お節介なんだよっ！」

真正のバカだ。

教室を見回すが、優子はまだ戻ってきていないようだ。  
早く謝りたい。

早く、以前のように話したい。

「ちょっと優子探してくる」

「あ？おう、次、体育だから、早めに戻って来いよ」  
賢人の声を背中に聞きつつ、俺は教室を飛び出した。

「ん？」

屋上への階段を通りかかったとき、上のほうから話し声が聞こえた。  
天気は雨。

こんな日に屋上へ出る人はいない。  
少し気になって、上ってみる。

「……俺は、君のことが好きだ。俺と付き合ってくれ」  
やべつ。誰かの告白だったのか。  
慌てて引き返そうとしたときだった。

「……うれしい」

「っ！？」

聞こえてきた声に、俺は耳を疑った。

優子の……声？

そつと影から覗いてみる。

「私もあなたのことが、好きです」

そう言った女子生徒は、間違いなく、優子だった。

そしてその正面にいる男子生徒は、徹先輩だった。

そんな……

そんな……

足元が崩れ去るような感覚。

胸が苦しくなり、呼吸は荒くなり、手足の感覚は薄れていく。  
目がかちかし、心臓は激しく脈打ち、血液の流れる音が聞こえる。  
頭が真っ白になり、世界が傾く。

どさっ

「えっ……アッキー!？」

優子の驚いた声が聞こえた。

まずい、立ち聞きしてたことがバレてしまった。

なんとかフオローしなくては……

「わ、悪い、立ち聞きなんてするつもりはなかったんだけど……」

「えっ? あ、それもだけど、倒れて……それに顔色も……」

「ほんと悪かったっ」

「ちょ、ちよっとっ」

反射的に立ち上がり、走り出す。

自分の気持ちに気付いて、わずか数分で失恋するとは。

気付くのが遅すぎた、ということだろうか。

……失恋って、苦しいものだったんだな。

どこに向かっているのかもわからず、ひたすらに走り続けた。

気付いたら教室に戻っていた。

「どうしたよ。死んだような顔して」

「……そんな顔してるか?」

「ああ。……その様子だと、優子ちゃんには謝れなかったのか?」

「……忘れてた」

賢人は呆れた顔をした。

この顔、今日何回目だ?

「まあ雨だし、次の体育は女子も体育館だろうから、チャンスはあるかもな」

「体育?」

「おいおい、忘れたのか? 男子はバスケ、女子は……確か、ハンドボールだったか」

チャンスがあるどころか、最悪だ。

あんなところを目撃して、優子とどんな顔で会えばいいというのか。  
「……俺、体育休むわ」

「何バカ言つてんだ。お前がいなくなったらウチのチームが困んだ。ほら行くぞ」

「うわ、ちよつと」

結局、賢人に押し切られることになった。

……俺、押し切られてばかりだな。

よく考えれば、同じ体育館内とはいえ、男子と女子は別々に授業をするのだから優子とは特に顔を合わせずに済む。

そして、つつがなく終了するはず……

「あ、危ないっ」

「えっ」

女子と男子のスペースを隔てるネット付近にいた俺。振り向くと、接近中の……ボール……？

「んがつ！？」

ゴム製の硬いハンドボールが、見事に鼻に命中した。

「あだだ……」

ぼたっ

「……？」

ぼたぼたっ

足元に赤い斑点ができた。

鼻血が出たらしい。

「あつ、ごめ……あ……う……」

ボールを投げたと思われる女子生徒が謝ろうとして、なぜかためらった。

「あつ……」

優子だった。

……正直、今はあまり顔を合わせたくない。

「すいません、保健室行きます」

俺は逃げ出した。



「ふう……」

ぽたぽたっ

一応押さえてはいるが、血が垂れてきてしまう。  
ぐいっ

鼻にティッシュが押し当てられた。

「使いなさいよ」

気付くと、優子がいた。

「……ありがとう」

短く答え、ティッシュで鼻を押さえる。

さっきのように垂れてくることはなくなった。

「……」

「……」

無言のまま並んで歩く。

謝るチャンスなのに……

なのに、いざ謝ろうとすると、なぜか勇気が出ない。

優子はちらちらとこっちを見ていた。

「……何だよ」

「……」

無視された。

「……私は、謝らないからね」

「は……」

「何でもないわよっ。じゃあ、お大事にっ」

まったく大事ではなさそうにそういうと、優子は踵を返し、もと来た道を引き返した。

~~~~~

「はあああ……」

どうして私は、こつも素直じゃないんだろう。

ボールをぶつけたのは、どう考えても私が悪い。

ケンカしたことは関係ないんだから、謝ればよかった。

心配だし、ぶつけたときとつさに謝れなかったからって、ポケットティッシュまで持って追いかけたのに。

……結局、謝らずに戻ってきてしまった。

「……意地っ張り」

今更言っても仕方がない。

そのときその場で意地を張らずに謝れる人のことを、素直な人、と呼ぶのだから。

昼休みのことをアッキーに見られたのも最悪だった。

「……アッキー、勘違いしただろうな」

当然だ。

傍から見れば、告白する男子生徒とそれを受けた女子生徒。

言い触らされることを恐れているのではない。

誰かにかかわれようが、冷やかされようが、そんなの構わなかった。

ただ、アッキーにだけは、私には他に好きな人がいると思われたくなかった。

こんなことになるのなら、徹先輩を焚きつけたりなんてしなければよかった

『相談があるんだけど』

『あんまり人に聞かれないから、屋上行きの階段に行こう』

私は言われるまま、徹先輩についていった。

相談の内容は、徹先輩には好きな人がいる、とのことだった。

『相手は俺の幼なじみだからさ、同じく幼なじみのいる優子ちゃんに話を聞きたいと思って』

徹先輩と沙耶先輩は、幼なじみらしい。

それで、幼なじみを恋人として見るができるかどうか、と聞かれた。

『まだ会って間もないのに、こんな相談するのどうかと思うんだけど』

ど』

そう言つて、徹先輩は笑つた。

私は、そういうのは人によると思う、と答えた。

ただ、私自身について言えば恋人として見ることはできる、とも。そこで話は終わるはずだった。

……私が徹先輩を焚きつけなければ。

『じゃあ、告白の練習をしておきましょうよ』

『え？』

『告白の練習。いきなりだと緊張しちゃうかもしれないから、私を練習台に』

『えー、いいつて、そんなの』

『ほらほら、いいから。私を沙耶先輩だと思つて』

『ここだと人が来るかもしれないし』

『人に聞かれたくないことだからつてここに連れて来たのは徹先輩じゃないですか。大丈夫ですよ。雨の日に屋上に行く人なんていませんから』

『……それもそっか』

『ほら、それじゃ、私は沙耶先輩です』

『ああ……』

徹先輩は咳払いを一つして……

『俺は、君のことが好きだ。俺と付き合ってくれ』

~~~~~

放課後。

部活中にそれとなく観察していたのだが、優子にも徹先輩にも、特に変つた様子は見られなかった。練習が終わつて。

「江藤君、ちょっといいかな」

徹先輩が話しかけてきた。

『優子と付き合うことになったから。幼なじみの君には言っておこうと思ってね』

そんな言葉が続くのだろうか。

見てしまったので知ってはいたが、改めて口にされると辛いものがある。

「あ、すみません、俺、今日は用事があるんでっ」

「あ、おいっ」

俺は走り出した。

「はあっ……はあっ……」

なぜか真っ直ぐ帰る気になれず、商店街のほうへ来ていた。だからといって、商店街に用事があるというわけでもない。

「ん？」

商店街には不似合いな、銀色の美しい毛並みのキツネがいた。

「よう、油揚げでもくすねにきたのか？」

しゃがみこみ、話しかけてみる。

キツネはどこか不機嫌そうに、こん、と一声鳴いた。

サファイア  
青玉のような深青の双眸は、ともすれば人間を越えるほどの利発さを感じさせる。

「あっ」

ふさふさの尻尾を揺らしながら、キツネは一目散に去っていった。

「……帰ろう」

結局、そのまま帰ることにした。

いずれにしろ、優子には謝らないといけない。

土曜のケンカのこと、今日の昼休みのこと。

それと、体育の時間、保健室に行く途中でティッシュをもらったことのお礼もだ。

「あっ」

自宅の近くまで来て、優子の後ろ姿を見つけた。

今度こそ、謝るんだ

「優子っ」

「っ！」

優子は振り返り、俺の姿を認めると、走り出した。

「ま、待てって」

俺も走り出す。

かなり距離がある。

家まではあとわずかだ。

追いつけない……

……ならば、ここからでも聞こえるようにするまでだ。

「優子っ、ごめんっ」

日が落ちた、真っ暗な住宅街に、俺の声が響いた。

優子が足を止め、振り向く。

「ごめん」

はつきりと優子に届くようにそう言って、俺は頭を深々と下げる。

優子が許してくれるまで、上げないと決めた。

ずっと、ずっと、とても長い時間、そうしていた。

……いや、実際にはわずかな時間だったのかもしれない。

足音がすぐ近くで止まる。

「アッキー」

頭上から優子の声がした。

「ひどいこと言って、ごめん」

「……………」

「あんなこと言っつもり、なかったんだ。言い訳に聞こえるかもしれないけど、勢いで言っちゃっただけで、あんなこと思ってるわけじゃないんだ」

頭を下げたまま言った。

「……………いいよ、アッキー。許してあげる。……………顔を上げて」  
顔を上げると、優子は微笑んでいた。

見る者すべてを救ってくれるような、優しい微笑みだった。

そんな優子を見ただけで、ここ数日の苦しみなど吹っ飛んでしまう。  
一仕事終えたような開放感を感じつつも、俺にはまだやるが残っている。

「……あと、昼休みのことも、ごめん」

「あつ……」

「なんていうかさ、あの、俺も優子のこと好きだけど、優子には幸せになってほしいって気持ちのほうが強いかからさ、俺、応援するよ」  
「えっ！？アッキー、今何て……」

優子が驚きに大きく目を見開いた。

「あ……」

言われて気付いた。

一仕事終えて気が抜けたのか、思わずとんでもないことを口走ってしまった。

「いや、えつと……何て言うか……」

何かフォローしなくては。

頭をフル回転させるが、何も思いつかない。

「……あのね、アッキー」

優子は気持ちを落ち着けるようにしてから言う。

「それは、アッキーの勘違いなの。あのとき、徹先輩は告白の練習をしてただけなの」

「……へ？」

「徹先輩は沙耶先輩が好きで、その相談を私にしてきたの。それで、私が告白の練習をしておいたほうがいいって……」

「な、なぬっ？」

なんだそりゃ。

「だから、その……ごめんね？」

……何だか力が抜けてしまった。

「それで、あの……さっきの返事なんだけど……」

優子は感情を押し殺すような表情だった。

恐怖。

先ほど力が抜けた全身の筋肉が、一瞬にして強張った。  
聞きたくない。

それはきつと、いい返事ではないから。

「あつ、ごめんつ、俺風呂入んなきゃいけないからっ」

「あ、アッキー！」

めちやくちゃんない訳を残して、俺は家に飛び込んだ。

## 第五話 銀色のアイツ

ばたん

後ろ手に自室のドアを閉めた。

電気もつけずにベッドに腰掛ける。

「ふう」

考えているのは、さっきのこと。

『なんていうかさ、あの、俺も優子のこと好きだけど、優子には幸せになってほしいって気持ちのほうが強いからさ』

アッキーは私が徹先輩と付き合い始めたと勘違いしていた。でもね、違うんだよ。

あれはアッキーの勘違い。

アッキーにだけは勘違いされなくなかった。

アッキーは……私の、好きな人だから。

ふと向かいの窓を眺めると、ちょうど電気がついて、カーテンの間から光が洩れてきた。

「アッキー……………」

私だって、アッキーと同じ気持ちなんだよ。

私は、アッキーのことが好きで好きで。

もちろん、付き合いたいっていう気持ちはある。

アッキーの彼女になりたいし、アッキーとデートだってしたいし、アッキーと恋人らしいこととしてもしてみたい。

だけど、それ以上に、アッキーには幸せになってもらいたい。だから……ごめんね。

私、アッキーの気持ちには、応えられない。

応えちゃいけない。

ほかの誰よりも、好きだからこそ。

一番に、幸せになってもらいたいからこそ。

私と恋人同士になったら、不幸になってしまうから。



だつて、私は。

私は……

~~~~~

「おっはよーっ」

「うわあっ!？」

突然の大声に、俺は文字通り飛び起きた。

「ほらほら、遅刻しちゃうから早くしてよねっ」

俺を起こしに来た優子は、そう言つてとびきりの笑顔を浮かべ、元  
気よく部屋を出て行く。

……なんだあれ？

やたらと機嫌がいい。

昨日の今日で、なぜあんなに明るく振舞えるのだろう。

俺なんかは、朝どんな顔して会えばいいのかわからず、昨夜はなか  
なか寝付けなかったというのに。

それとも、優子は昨日のことなど何とも思っていないのだろうか。

「……それはなんか悲しすぎるぞ」

とにかく遅刻はまずいので、急いで着替えることにした。

「おっはよーっ」

教室に入った途端、優子が声を張り上げて挨拶する。

「……お前、元気だよなあ」

「何よ、アッキーが元気なさ過ぎるのよ。もう、定年迎えたおじい  
さんじゃないんだからっ」

バンッ

「いてっ」

思いつきり背中を叩かれた。

……頼むから、手加減してくれ。

「よう、お二人さん」

「おはよ、賢人くん」

「おう、賢人」

「秋彦は相変わらず尻に敷かれてるのか？」

「はいはい、バカはほっときますよー。……あ、おはよー、まりりん、さゆっち！」

優子は、よく一緒にいるクラスメイトのところへ行く。

賢人は呆気にとられたように、ぼーっと優子の背中を眺めていた。

「……なあ」

「うん？」

「優子ちゃん、何かあったのか？」

「……いや、特に聞いてないけどな。何で？」

告白してしまった、という事件はあったが、あまり言い触らすようなこともない。

だから俺は、茶を濁しておいた。

「優子ちゃん、妙に明るいつつうか、空元気っぽいっつうか、とにかく変じゃないか？」

「……」

「ま、いいけどな」

賢人は肩をすくめ、席についた。

「ああ、江藤君、ちょっといいかな」

「あつ、徹先輩」

「昨日のことなんだけど……」

「とーおーるっ、帰ろっ」

「うわっ」と

徹先輩に、沙耶先輩が後ろから抱きついた。

「あ……」

そして徹先輩越しに俺と目が合うと、恥ずかしそうに離れた。

「……ええっと」

「昨日、優子から全部聞きました」

「あ、ああ、そうなんだ。それはよかった。……俺たち、付き合うことになったんだ」

「はは、一目瞭然ですけどね」

「はあ、恥ずかしいとこ見られちゃったな」

沙耶先輩は顔を赤くしながら、まんざらでもなさそうだ。

「……ところで、優子ちゃん今日変だったけど、どうしたの？何かあった？」

「昨日のことで、ケンカでもしたか？それだったら、俺も謝らないといけないな」

「……やっぱり、変だと思いますか？」

「……？」

二人は不思議そうに顔を見合わせた。

「変っていうか……」

「……」

俺は、この二人の、というか徹先輩の恋路について知っている。

この二人になら、話してもいいかもしれない。

「あの……俺、昨日、優子に告白しちゃったんです」

「ええっ？」

そしてその返事は……

聞かずに逃げ出したんだ。

「たぶん、それが原因なんじゃないかと……」

「それ、ちょっとおかしくない？」

「え？」

「なんで、告白されて無理矢理明るく振舞う必要があるの？」

「俺もそう思う。優子ちゃんのあれは……苦しんでるのを周りに知られたくないような、そんな態度だって気がする」

「だから、俺の告白が苦痛だったんじゃない？……？」

なんだか自分で言って悲しくなってきたぞ。

……俺の気持ち、優子にとっては苦痛だったなんて。

「それはないわ。私の見る限り、優子ちゃんも江藤君のこと、憎からず思ってたように見えたからね」

「んー、俺から見てもそうかな。仮に好きじゃなかったとしても、告白されて苦痛に感じる相手じゃなかっただろうな」

「……つまり、優子は今苦しんでいるのは確かだけど、その原因は俺の告白ではない、ということですか？」

「ああ。加えて、その苦しみは他人に知られたくないもの、かな」ということだろう。

優子が他人に知られたくないこと。

そんなもの、皆目見当もつかなかった。

先輩たちと別れ、一人帰路につく。

昨日の夜、俺が謝ったときには、優子は特に変わった様子 wasn't 。

そして今日の態度。

それを考えると、やはり俺の告白が関係しているとしたか考えられない。

……いや、もしくはあのあと、家で何かあったのかもしれない。

両親が大ゲンカしたとか。

いや、大ゲンカなんかすれば隣のウチまで聞こえてくるはずだし、そもそも優子の両親はすごく仲がよく、滅多なことではケンカなんてしない。

ならば、親に叱られたとか。

しかし、優子が親に叱られたくらいで苦しむだろうか。

それに、そんなことが『知られたくない苦しみ』に当てはまるだろうか。

わからない。

こんなに長い付き合いだというのに、俺は優子のことを何一つわかっていなかったのか。

「ううーん……」

「相当、悩んでいるみたいだね」

「えっ？」

突然聞こえてきた、涼やかな声。

年長の者が持つ、特有の落ち着きを孕み、そしてなお若々しい生気をも感じさせる、耳に心地よい声だった。

振り返るとそこには……

誰もいなかった。

「あ……あれ？」

幻聴？

「幻聴などではないよ。僕はここだ。足元をござんよ」

足元にはキツネがいた。

日が沈み、暗い夜道にぼんやりと浮かび上がるその毛並みは、神秘的な銀色。

ぴんと立った耳は、辺りを警戒しているのか、ぴよこぴよこと動くゆらゆらと揺れる毛足の長い尻尾は、月明かりに照らされてきらきらと輝く。

俺を見上げる青玉サファイアを湛えた双眸には、人類を凌駕するほどの英知を思わせる。

「やあ、初めまして。……いや、また会ったね、のほろがいいかな？」

キツネが喋っている。

そんな異常な現象が目の前で起こっているというのに、まったく驚かない自分に驚いていた。

このキツネは、『普通じゃない』ことが自然に思えた。

「ヒトの言葉で話するのは今日が初めてだけど、僕たちはすでに会っているよ。……二回、ね」

二回も？

「あつ……！」

「思い出したかい？」

いつかの商店街で。いつかの教室で。

「ああ、あのときの」

「……一応言っておくけど、僕は油揚げをくすねたりはしてないからね」

根に持っていたらしい。

「それより……悩んでいたのかい？優子さんのことで」

「……よく、わかったな」

「……」

キツネは黙り込んだ。

「優子はさ、何か苦しんでるみたいなんだ」

「……」

「俺は、何とかしてやりたい」

「……何とか……？」

「ああ、俺が何とかしてやらなきゃいけないんだ」

その言葉は、キツネに向かつてではなく、自分に言い聞かせるように。

諦めかけていた自分を、奮い立たせるために。

「……君に、何がわかるんだい？」

「えっ？」

「君は何も知らない。彼女の真意も、苦しみも」

口調も、声も、表情も、視線さえも。

キツネの物腰は、依然として柔らかいままだ。

にもかかわらず、その言葉は、非友好的なもの、敵意とさえ呼べるものを纏っていた。

「……まるで、自分は何かを知っているかのような言い草だな」

「知っているよ。彼女が苦しんでいる理由も、なぜそうしなければならなかったのかも……」

「そ、それって、何なんだ？」

「それを君に教えるつもりはないよ」

「なっ！？ど、どうしてっ？」

「……」

だんまりを決め込むキツネに、腹が立ってきた。

「おいっ、答えろよっ」

「……君は、彼女の気持ちを考えたことはあるかい？」

「……優子の、気持ち……？」

「彼女は優しい人間だ。とても、ね」

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。……そして、それゆえに、苦しんでいるんだよ」

「……………」

優子が優しい？

それゆえに苦しんでいる？

……確かに、優子が優しいのはわかる。

素直じゃないことはあっても、意地を張ってしまつところはあつても、常に周りのことを気にかけている。

でも、それがなぜ苦しむことに繋がるのだろうか。

「彼女が苦しんでいる理由を知れば、君はそれを解決しようとする。そして……それが、さらに彼女を苦しめる結果となる」

「何で、それが優子を苦しめるんだよっ」

「お互いを大切に思うがゆえに、隠しておきたいことっていうものがあるんだよ。君が危険に晒されることになるのを、彼女は恐れている」

「……だから教えない、か」

優子は、俺に相談してこない。

俺を危険に晒す可能性があるから。

だから、一人で抱え込もうとしているんだ。

だけど、俺だってこのまま見て見ぬふりをしているつもりはない。

優子に話を聞いてみよう。

まずはそれからだ。

「……いい顔をするじゃないか。何か決心したのかい？」

「ああ、やっぱり優子のことは俺が何とかしてやるんだ」

「そうかい。それなら、僕ともまた会うことがあるかもしれないね」

「……じゃあまた」

キツネはくりりと踵を返し、夜道を歩いて行った。  
携帯を取り出し、時間を確認する。

19:27

「よしっ」

この時間なら、優子は部屋にいるだろう。

俺は、全速力で家に帰った。

こんこんっ、こんこんっ

がらっ

「どうしたの？何か用事？」

窓を叩くと、すぐに優子が顔を出した。

「優子、何か悩んでるんだろ」

単刀直入に切り出すと、優子は驚いた顔をした。

「え……？あ、あの、アッキー、えと、どうして？べ、別に悩んで  
なんか……」

「ああ、そっか。悩んでるんじゃないくて、苦しんでるんだよな」

「……………」

優子が黙って俯く。

それは、何よりも肯定の意味を持っていた。

「それを俺に言えないのは、危険な目に遭わせたくないから、だろ  
？」

「……………うして」

「えっ？」

優子の声は震えて弱々しく、聞き取れなかった。

「……………どうして……そう、思っの……？」

「……………さっき、キツネに会ったんだ。そいつと話をした」

「……………そっか」

優子は観念したように顔を上げた。

「でも、何もしないで。アッキーを殺さなかったのは、私の意志だ



から。だから……仕方ないの」

「えっ!？」

今、何て言っただんだ？

俺を……殺さなかった、ってどういう意味だ？

「……どうしてそんなに驚いてるの？」

「そりゃ、お前……」

言いかけて、気付いた。

優子は、俺がキツネからすべて聞いたと思ってるんだ。

それなら、このまま白を切れれば知りたいことはすべて聞きだせるだろう。

だけど。

「……俺、キツネからはほとんど何も聞いてないんだ」

「えっ……」

「悪い」

「……」

「聞かせてくれないか？俺……今の優子を見てるの、辛いんだ」

「……はあ……わかった。話してあげる」

優子は諦めたように笑った。

でも、その笑顔には、どこか嬉しそうな色が滲んでいる。

「ここで話すつてのもなんだから、少し歩かない？」

「ああ、わかった。……じゃあ下で、な」

「……ねえ、アッキー」

「ん？」

「さっき、あのまま適当に話合わせてれば全部聞けたんじゃない？

どうして、わざわざ……？」

「……優子を、騙したくなかったんだよ」

「騙す……？」

「優子を助ける立場の俺が優子を騙してちゃ、優子が可哀相だからな」

そう。

優子を手助けしたいんだ。

優子に、心から信頼されて、『俺が何とかしてやる』って胸を張って言いたい。

そのために、優子には隠し事をしないで、しっかりと向き合いたい。

「……ふうん」

「……別にいいだろ、何だって。それより、寒くない格好して来いよな。夜はまだ少し冷えるぞ」

「うん、ありがと」

そう言って、俺たちは一度別れた。

## 第六話 別れ

俺たちは、無言のまま歩いていった。

なんとなく、何かを話せる気分ではなかった。

さつき優子が口にした、『殺す』という単語。

冗談ならともかく、本気で言うことなんて日常的にはまずあり得ない。

それはつまり、優子の身に起こっていることが、非日常であることを意味する。

俺に、何かができるだろうか。

解決してやることができるのだろうか。

……いや、絶対してやるんだ。

どんなことがあっても。

俺は、優子のことを、愛しているから……

誰もいない公園は、静か過ぎるくらいだった。

二人並んで、ベンチに腰掛ける。

ザアーーーーッ

少し強めの風が吹き抜けていき、木々がざわめく。

その様子は、見る者に言い知れない恐怖を呼び起こす。

「ちようど、一年くらい前かなあ……」

優子が唐突に切り出す。

「私ね、あのキツネに会ったの。ふふっ……死神、なんだって。信じられる？」

「……は？」

シニガミ？

何、それ？

「……シニガミって、あの死神か？」

「うん、たぶんその死神」

そして、優子は語り出した。  
一年前の出来事を

「じゃあまたねー、アッキー」

そう言つて、私はアッキーと別れた。

今日は久しぶりにアッキーを買い物に連れ回した。

買い物といつても、ウィンドウショッピングだけで、しかも何も買つてないけど。

でも、いいんだ。

アッキーと一緒にいられるだけで楽しいんだもん。

「アッキー……」

不意に、胸が切なくなる。

会いたい。

さつき別れたばかりなのに、もう会いたくなってる。

「……まったく、ニブいんだから」

普通、こんなに積極的にアプローチしたら、気付きそうなものじゃない。

それとも、アッキーにとってはただの幼なじみなのかな……

こういうとき、『仲のいい幼なじみ』という関係は、足枷にしかない。

「やっぱり、ストレートに言うしかないのかな……」  
好きです、って。

……。

「ひゃあああああつ、無理無理無理っ、恥ずかしくて死ねるっ」

「君が、エトウアキヒコさんかい？」

「えっ？」

突然聞こえてきた、涼やかな声。

振り返るとそこには……

誰もいなかった。

「あ……あれ？」

幻聴？

「幻聴などではないよ。僕はここだ。足元をござんよ」

足元には、銀色のキツネ。

夕闇に浮かび上がるその姿は、幻想的を通り越して神々しくさえあった。

……なんとなく、嫌な予感がした。

喋る銀色の不思議生物に目を付けられるなんて、ただごとじゃない。

「……何か用なの？」

「エトウアキヒコさんなのかい？」

「……そうよ」

話が進みそうにないので、嘘を吐いておいた。

「そうか……残念だけど、君には今日を限りにこの世を去ってもら  
うよ」

「……え？」

な、何言って……

その途端、キツネの目が光を帯び始めた。

全身から力が抜けていく……

「あ、ちょ、ちよつと……何……？」

「すまないね。これも仕事なんだ」

意識が段々薄れていく。

私、このまま……死ぬのかな……

ピーッ、ピーッ、ピーッ、……

聞きなれない電子音が聞こえてきた。

「あれ？どうなってるんだ？」

キツネの戸惑ったような声。

と同時に、ビデオの巻き戻しをするように意識が戻ってくる。

「……君は、エトウアキヒコさんじゃないね？」

首から下げたペンダントのようなものを見ていたキツネは、顔を上げ、私をじろりと睨んだ。

「……そんなの、名前聞けばわかるじゃない。なんで女の私が、男

の名前持つてるのよ」

「人間の名前なんて知らないよ。僕は仕事をしているだけだからね」  
キツネは呆れたようにため息を吐いた。

「なぜ、エトウアキヒコさんのふりをしたんだい？」

「話が進みそうになかったからよ」

「君がエトウアキヒコさんじゃないのなら、関係のないことだ。話を進める意味がないじゃないか」

その通りだった。

キツネの立場から見れば、全くもってその通り。

だけど……

「……嫌な、予感がしたのよ。現にアンタ、アッキーを殺そうとしてたんじゃない」

「ほう……」

キツネは興味深そうに目を見開いた。

「アッキー、か。君はずいぶんと彼女と親しいんだね」

「彼女？……誰？」

「誰って……エトウアキヒコさんに決まってるだろう」

「だから、それは男の名前だって言ってるでしょっ」

「ああ、男の人なのか。……それで、君は彼と親しいんだね」

「……うん」

そういえば、私は何でこのキツネと話をしてるんだろう。

アッキーを殺そうとしてるヤツなんかほっとけばいいのに。

「……なるほど。さっき別れた彼、か」

「……っ！？」

大した洞察力を持っているみたいだった。

「ま、待って！お願いっ、彼を殺さないで……」

私はキツネにすがりついた。

目からは何かしょっぱいものが溢れてくる。

「そういうわけにはいかないよ。仕事だからね」

キツネは淡々と返す。

「お願い……お願いだから……アッキーが死ぬなんて……嫌だよ……」

「……………」

キツネはじつとこつちを見ていた。

何もかも見透かすような、サファイア青玉の眸で。

「……なるほど。彼は君にとつて、とても大事な人なんだね」

その声は同情の色を含んでいた。

「だけど、僕にはそれを決める権限はない。……仕事だから、ね」

「仕事って、一体なんなのよ……？人を殺す仕事なんて……」

「死神、だよ」

「え……？」

「死神。人間だけではなく、すべての生き物たちに、死を与える仕事だ」

「……………」

心の中がからつぽだった。

死神とか何とか、そんなことはどうでもいいとして。

このキツネの仕事は、アッキーを殺すこと。

このキツネに、決定権がないこと。

この二つのことを考えると……アッキーが死ぬことは確定的だった。

「……君に、わずかばかり、時間を与えよう」

「……どうということ？」

「君には、僕の部下として死神になってもらう。そうすれば、僕の仕事を手伝ってもらうことができるからね」

「……私に、アッキーを殺せって言うの……？」

「そつだ。でも、その時期は……君が決めることができる」

意味がよくわからない。

「仕事をサボる死神もいるからね。ただ……サボればサボるほど、罰は重くなる」

「つまり……？」

「君に、彼を殺す仕事を任せる。それを遂行するか、サボるか……」

それは君次第だ」

「あ……！」

私が『仕事』をサボれば、アッキーが死ななくて済む……！

「あ、ありがとう……」

「ただし、忘れちゃいけないよ」

キツネが釘を刺す。

「仕事をサボればサボるほど……彼を庇えば庇うほど、君自身の受ける罰は重いものになる」

「……わかりやすく言えば、私が罰を受ける代わりに、アッキーが生き延びられる、ってことね？」

「そういうことだ。それから……あまり長く延ばさないように。一年も延ばせば、確実に死刑だ」

そんなの、怖くもなんともない。

アッキーがいなくなってしまうことに比べたら。

「死神の処刑は、『ほうじやく炮烙』という惨い方法だ。むじ甘く考えないことだよ」

「……こっち炮烙？」

「人間界でも昔使われたらしいね。猛火の上に、油をたっぷり塗った銅製の丸太を渡して、その上を渡らせるんだ。みんな、火だるまになって……思い出すだけで吐き気がするような方法さ」

「そんな……」

……聞くだけでも吐き気がする。

「早いうちにお別れを済ませて、殺すこと。いいね？」

「……うん」

頷いたはいいものの、どうすればいいかなんてまるでわからなかった。

「それから、一年が経ったわ」

そこまで一気に話した優子は、そこで言葉を切った。

俺には、まだ信じられなかった。



優子が死神だということ。

俺を殺さなければいけなかったこと。

そうしなかった優子は……

……惨い方法で処刑されること。

「……私はね、ずっとアッキーのこと、好きだった」

優子の言葉はまるで……

「アッキーが私のそばからいなくなるのなんて、耐えられないよ」

最期の瞬間を楽しむかのようで……

「これは、私のわがままなんだ」

ずっと健気に燃え続けていた、命の炎は……

「だから……ね、そんな顔しないで」

もう、燃え尽きる寸前だった。

「……ふ……ざける、な………」

精一杯の言葉は、嗚咽で震えていた。

「俺の、こと……本気で……好き、なら……さあ……」

震えを止めるように、拳を握り締める。

「俺の隣からいなくなるなっ！俺のために命なんて懸けるなよっ！」

「アッキー」

優子がそつと手を握った。

「アッキーのためだから、私、命だって懸けられるんだよ。アッキ

ーのこと、愛してるから」

優子の優しい掌の中で、爪が食い込むのも構わずに更に強く拳を握り締める。

「そんなの……そんなの、本当の愛じゃないだろ」

俺は、優子にそんなこと望んでいない。

ただ、隣にいてほしただけなのに。

「そんなの、愛情の押し売りじゃないかっ！相手のことなんか全然考えてないじゃないかっ！」

「アッキー……」

「相手が一番望んでないことじゃないか……それなのに、どうして

……」

「……………お迎えが、来たみたい……………」

春物の薄いコートの袖で乱暴に涙を拭い、顔を上げる。

そこには、キツネがいた。

「結局、『仕事』をしないまま『向こう側』へ行くんだね？」

「……………うん」

キツネの目が光を帯び、すぐ側に入り口のようなものが生じる。

そこから覗く『向こう側』は、草木は枯れ、空は淀み、大地は腐っている。

辺りには動物の死骸と思しきものが、喰い散らかされたように転がっている。

まさに、地獄、そのものだった。

「待てよつ、優子っ！」

こんなことつてあるか。

あんな世界に、優子を行かせてたまるか。

『向こう側』へ行くこうとする優子の腕を掴む。

「行くな……………！」

万感の思いを込めて言った。  
なのに。

優子は、そつと俺の手に手を重ね、優しくそれを外す。

「私は、幸せだったよ。だって……………大好きな人が、私の死に泣いてくれたから」

優子の手がそつと俺の涙を拭う。

溢れる涙は勢いを増して、ぽたぽたと地面に黒い斑点を作った。

「俺は……………不幸だよ。だって、大好きな人が、自発的に俺の側からいなくなるうとしてるんだから」

優子は寂しそうに笑った。

「……………さようなら」

優子が発したのは、別れの言葉。

いつもの、『じゃあね』とか、『またね』のように、また会うこと

を前提としたものとは違う。

もう、二度と会わないことを告げる、終幕の言葉。

「優子っ」

「アッキーなら大丈夫。すぐにいい女捕まえられるって。私ほどの美女を引つ掛けたんだから」

いつもみたいな、冗談混じりの口調。

でもその顔には、一筋の涙が光っていた。

「いつまでも私に操みさおを立てたりなんて、かつこ悪いことしないでよね。必ず、誰かと幸せになること」

いつも通りの、ちよっとお姉さんぶった言い方で。

それなら、俺も、いつも通りに。

優子には、隠し事をしないで、本心を。

「……誰かと幸せになんて、絶対なつてやらないからなっ！」

「アッキー……」

「優子以外の人を好きになんて、絶対にならないからなっ！」

「アッキー……っ！」

優子は顔をくしゃくしゃにして、俺の胸に飛び込んだ。

「アッキー、私だつて行きたくない……行きたくないよぉ……」

「優子……」

「私以外の人と幸せになんて、なつてほしくないよ！」

抱きしめた。

このまま一つになつてしまえるくらい。

強く、強く。

息苦しくなるけど、それさえも心地よい。

ぶわっと一陣の風が吹き、『向こう側』への入り口が閉じた。

「逃亡者をかくまったら、僕も同罪かな？」

キツネが悪戯つぽく笑う。

「……いいのか？」

「君たちを見殺しにするような、非人道的なことはしたくないからね」

「あ、ありがとう」

「なに、礼には及ばない。これは僕のわがままだから、ね」  
そう言うキツネの目は、優しい色だった。

これで、優子が死ぬこともないんだ。

死神界からは、命を狙われることになるのかもしれないけど。  
でも、大丈夫。

根拠はないけど、何とかなるような気がしていた。

「えへへ、アッキー」

優子の安心しきった顔。

そんな優子を見てると、俺まで安心する。

安心したら、また涙が溢れてきた。

「わわっ、アッキー、どうしたの!？」

「な、なんでもない」

さっきの涙とは、180。意味が異なる涙。

嬉しかった、なんて、恥ずかしくて言えない。

「おやおやあゝ、なんだか楽しそうですなあ。俺も混ぜろよ」

幸せだった気持ちをぶち壊すような、下卑<sup>けび</sup>た声が聞こえた。

三人揃って振り向く。

そこには、破れた汚らしい黒のローブに身を包んだ、人らしきものがいた。

右手には、大きな鎌を持っている。

すっぽりと頭を覆うフードの下は、暗いためによく見えないが、骸骨であろうと思えるほどに、その姿は死神のイメージ通りだった。

「あなたは……」

キツネが硬直する。

「知り合い、なのか？」

「僕の、上司です。……エトウアキヒコさんの死を決めた人、です

……」

嫌な動悸がしていた。

隣で震えている優子の手を握る。

「大丈夫、絶対何とかしてやる」  
根拠はないけど、不思議とそう思っていた。

## 最終話 愛する人へ

「なんだなんだあゝ？お前、俺を裏切ろうつてのかあ？」

キツネに向かつて、死神が言う。

「……あなたは狂っています。人を殺し、幸せを奪うことで快樂を得る。それも、どんどんエスレートして……薬物中毒（Narcotic Addiction）のように」

「だあつはつはつは、薬中ってか？そいつあ、もつともだ」  
この上なく愉快そうだった。

人を殺し、幸せを奪うことで快樂を得る。

……そんなの、狂ってる。

「お前の好きにはさせない」

腹に力を込め、雰囲気呑まれないように言った。

自分を鼓舞するように。

隣で震える優子を安心させるように。

「だったらどうするってんだ？弱っちい人間ごときが」

そう言つて、左手を軽く薙ぐ。

「があっ！？」

「アッキーっ！」

車に撥ねられたかと錯覚するような、強い衝撃。

口の中は血と泥の味が混じっていた。

「ぐっ……平気だ」

すぐに立ち上がる。

膝がぐくぐくと笑っていたが、優子に心配はかけたくない。  
と、優子が俺の腕を取り、自分の肩に回した。

「ほら、そんなに震えて……立ってるのもやつとじゃない」

優子に肩を借りると、不思議と震えが治まっていく。

「……やっぱり、あなたは間違っています」

キツネが俺たちを庇うように前に立つ。

「なるほど、裏切るってことだな」

「上司を諫めるのも部下の務めです」

睨み合う二人。

街灯しかなく、暗い公園。

音といえば、風音だけ。

そんな静かな空間で、この二人の間だけは空気が違った。  
ぴんと張り詰めた糸のように。

高まった緊張は、ぷつんと音を立てて決壊した。

「殺してやるっ」

「止めますっ」

二人が発した力の奔流が、正面からぶつかり合う。

大きなエネルギーは虹色の光となり、暗かった公園を様々な色に染め上げていく。

その強さは、直視できないほどだ。

「ぐう……力が……足りない……っ……」

キツネが呻く。

そのとき、光の向こうからこちらへ動く影を目が捉えた。

「秋彦君っ」

キツネもそれに気付いたようだった。

が、もう遅い。

死神は、右手に持った大鎌を振り上げ……

「優子っ」

「きゃっ」

優子を抱きしめるようにして庇う。

「アッキー！」

ひゅんっ

首の後ろ、わずか数ミリを、冷たい風が通り抜けた。

どさっ

気付くと、地面に倒れた優子に覆いかぶさるような格好だった。  
どうやら、優子が引き倒して助けてくれたようだ。

どんっ

腹に響く、重低音の爆発が聞こえた。

「無事かいっ!？」

キツネが助けてくれたようで、振り返ると、死神は少し離れた位置にいた。

「優子、怪我不いか？」

「バカッ！」

「うわっ!？」

……こんな近くで大声を出すなよ。

「何考えてんのよっ、この大バカッ!『一番望んでないことだ』って言ったの、アッキーでしょっ」

「あ、ああ、そうだったな。悪い」  
そうか。

優子はこんな気持ちだったのか。

自分の命を犠牲にしても、相手を守りたいと思う気持ち。  
でも、それはただの自己満足なんだ。

その行為が相手をどれほど傷つけるのかを、俺は一番よく知っていたはずなのに。

「勝手な真似しないでよっ」

「これで、おあいこだろ?……もうしないから」

「……ばか……」

立ち上がり、死神に向き直る。

「なんだ?二人仲良く、あの世に行く覚悟ができたか?……もっとも、一緒に行ったとしてもあっちではバラバラになるだろうがな」  
ぎやはは、と下品に笑った。

「……もう、やめてください」

キツネの発したその声は、悲痛だった。

「あなたはそんな人ではなかったはずです。思い出してください。  
あなたの愛した人を。……今なお、愛している人を」

死神が笑うのをやめた。



「愛する人と幸せにできない辛さを、誰よりも知っているはずではないですか。それなのに……」

「黙れ」

死神は小さく震えていた。

「愛することの意味もわからん小僧が、何を偉そうに！」

「わかります！あなたの奥さんも、お子さんも、そんなこと、望んでいない……」

「黙れっ！俺は妻と娘のためなら何でもするっ！これがあいつらのためなんだっ！」

「……違うわ」

静かに、低い声で。

でも、力強く。

優子が、否定の言葉を発した。

「あなたのやっていることは、愛情の押し売りだわ」  
そう。

最初は優子がやって。

さつきは俺がやって。

相手が最も望まないことを、『一番いい』と勘違いする。

どんな形かは知らないけど、そんなすれ違いを、この人もやっていったんだ……

「黙れっ」

「……あんたにも、大切な人がいるんだろ？」

言葉に、ありつただけの力を込めた。

「大切な人がいるなら、その人の気持ちを考えてあげるべきなんじゃないか？」

『一番いい』を決め付けて押し付けるのではなくて。

相手のことを、わかった気になるのではなくて。

しっかりと対話し、向き合うことが大切なんだ。

「……だまれ……」

その言葉には、もうさつきほどの勢いはなかった。

「心なんて、目に見えないものだからさ、言葉にしないと伝わらないだろ」

「……………」

「相手の心を確かめもしないで相手のためになるだなんて、自己満足もいいところだ」

「……………自己満足、か」

死神は、大きく息を吐いた。

「そう、だったのかもしれない。……………会社を辞めたときから、俺は自棄になっていたのかもしれない」

「……………死神の世界にも、会社があるのか？」

「ははっ……………俺は、元人間だ」

死神はフードを脱いだ。

その下に現れたのは、骸骨なんかではなく、少しくたびれた感じの、優しそうなおじさんの顔だった。

ずっと苦しんでいたことを、吐き出したかったのかもしれない。

ひどい会社だね。違法コピーは横行し、ライバル社へのスパイ行動ももはや常識。

カネのためなら何でもする。

そんな会社が上手くいくはずもない。

経営が悪化すると、俺の部下の首を切ろうと言い出した。

有能なヤツだね。上の連中は立場が脅かされると思っていたのか、前々からよく思われてなかったんだ。

いいヤツだったのに……………経営の悪化は、バカな上のせいだというのに……………アイツは、首になった。

猛反対をしていた俺も、首にすると脅された。

もう、嫌だった。

こんな腐った会社のために働きたくないなんてない。

俺は、妻のことも、生まれて間もない娘のことも顧みず、会社のビルの屋上から飛び降りた。

死んでしまってから、後悔したよ。

俺の軽率な行動が、妻と娘を不幸にってしまった。

周りの幸せそうな家庭を見るたび、二人は辛そうだった。

ならば、俺が幸せな家庭をなくしてしまえばいい。

そうすれば、二人が辛い思いをしなくて済むから。

「ははは、今考えれば、なんてバカげた考えだろうと思うけどね」

おじさんは寂しそうに笑った。

「俺は、二度も過ちを犯してしまったな。どちらも、他人のことなどこれっぽっちも考えていない、ただの自己満足だ」

「おじさん……」

「こんなオヤジの戯言に付き合ってくれてありがとう。少し気が軽くなったよ。……といって、俺の罪が軽くなるわけじゃないがね」

「……………」

「さあ、お別れだ」

おじさんが『向こう側』への入り口を開く。

「しばらく、『こちら側』と『向こう側』は切り離すでしょう。死神は死神界に閉じ込める。……それじゃあ、元気だな」

「あ、あの……」

キツネが言いにくそうに口を開いた。

「優子さんも死神です。だから……」

「あ……」

そうだった。

優子も、『向こう側』に閉じ込められるのか……？

「そ、そんな……」

「お、お願いですつ、私、『こっち』にいたい……」

「……好きにきなさい」

「えっ？」

おじさんはこちらに背中を向けたまま言う。

「当然、死神は全員『向こう側』へ連れて行く。ただ、そうだね……

…人間と同じ姿をした死神一人をこの広い人間界から探し出すのは、さすがの俺でもちよつと難しいかな」

おじさんは振り返り、悪巧みをする少年のように笑って見せた。

「そ、それって……」

「ほら、行くぞ、キツネ」

「……………僕の名前は覚えて下さっていないのですね」

二人、いや、一人と一匹が『向こう側』へ消える。

「ありがとう……………ありがとう、おじさんっ!」

結局、名前も聞かないまま…………

俺たちは、入り口が消滅してからも、しばらく眺めていた。

「あ……………!アッキー、見てっ」

優子のはしゃいだように東の空を指差す。

いつの間にか白んでいた空に、太陽が今、まさに昇ろうとしていた。

「うわ、すっげ……………」

優子と、初めて二人で見る日の出。

それは、俺たちのこれからを祝福してくれるかのように。

「……………綺麗だね」

「……………ああ」

神々しいまでの輝きで、俺たちの明日を照らし出してくれた。

「アッキー、大好きだよっ」

ちゅっ

唇に触れる、温かく、柔らかい感触。

「……………えっ」

それはほんの一瞬の出来事で。

夢でも見ていたかのように、朧気で。

「あははっ、アッキーと朝帰りだねっ」

きゅっとな手が握られる。

でも、夢じゃないんだ。

優子が急に真面目な顔をする。

「不束者ですが、よろしくお願いします」

畏まって頭を下げる。

「……………こっちのセリフだ」

「ぷっ、あははっ、何それ……こちらこそ、でしょー？」

「う、うるさいな、いいだろ、何だって」

「あははっ」

優子の笑顔は、作ったところのない、自然なもので

この笑顔が取り戻せて、本当によかった。

そう思った。

きゅっ

優子の手を、しっかりと握り返す。

「どうしたの？」

「いや……よろしくな、改めて」

「ふふっ、こちらこそ」

優子の幸せそうな笑顔。

もう二度と、失わせない。

Fin .

## 最終話 愛する人へ（後書き）

Narcotic Addiction、いかがでしたか？意見、感想等いただけると幸いです。著者としては、執筆途中でストーリーの核心部分を変更したため、活かせなかった設定があつたのが残念です。次回作からは、「田中伊織」という名前に変更しようと思っています。次回作も是非読んでくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9852c/>

---

Narcotic Addiction

2010年10月23日13時54分発行